
そのベクトルをねじ曲げて

赤松タシロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そのベクトルをねじ曲げて

【Nコード】

N6201Q

【作者名】

赤松タシロ

【あらすじ】

もしも美琴が一方通行の妹だったら？

とあるIF世界の話。

俗に言う『ハートフルボックストーリー』です。

第1話（前書き）

※この作品は非常にお馬鹿な内容となっております。中心となる一方通行、美琴は共に性格崩壊。原作からは、ズレているなんて生易しいレベルではありません。そういったモノがお嫌いでしたら、早々に『戻る』ボタンを押して下さいね。

また、第17話辺りからマシになり始めます。

（当お馬鹿作品は小話が何個か詰められている構成で、稀に一纏まりのストーリーとして進む、という形で成り立つ）
なので、そのことを思考の隅っちょに置いておいて下さるとありがたいです。↑

では、よろしくお願い致しますm（ ）m

第1話

宵闇が学園都市に薄く広がり始めた。

林立するビルや繁華街のネオンの光は相変わらず学園都市を照らしてはいるが、流石に郊外となれば話は別のようだ。申し訳程度の光と共に街灯は目を覚ましたが、元々人通りの少ないここではあまりにも頼りない。

幽霊でも出そうだ、とは人々の共通の解釈だ。科学の存在があるとはいえ、好んで近寄りたい場所ではないし、不気味であることは変わらない。

そんな場所にたった一つの人影があった。ぼんやりと浮かび上がる白髪に、赤い瞳。中性的な顔立ちの青年だった。

指差して幽霊だろう、と言いたくもなるが、缶コーヒーが大量に詰め込まれたビニール袋を持ち歩く幽霊などいない。そんな頭が幸せな幽霊なら、既に成仏していてもおかしくはないのだ。

彼の名前は、一方通行。アクセラレータ無機質な名前が付けられているとはいえ、確かに彼は生きている人間。ただの頭が幸せな人間だ。

前置きは兎も角として、あまり近づきたくは無い存在だと、普通の感性をしている者なら思うだろう。だが、そんな彼に近づく影があった。

タッタツと小刻みな音。足音だということは明らかである。だと言うのに、一方通行に気付いた様子は一切無い。

足音は止まることなく、一方通行に近付いてゆく。そして――

「おにーちゃん！」

そんな元気な声と共に、足音の主は一方通行の背中に飛び付いたそれは、少女の形をしていた。

ショートカットの茶髪をピンで留め、気の強そうなつり目は、現在は何かに捕われたかのように緩められている。

少女の名前は御坂美琴。みさかみこと

この学園都市において彼女の名前は有名な方だ。何故か、はこの際割愛するが、有名人であることには変わりはない。

有名人ならばそれ相応の行動があるはずだが、現在のみに限って、いや、一方通行と共にいる時に限って普段とは全く異なる反応をしているのは、例外と知られていない。

美琴は一方通行の背に顔を埋めると、聞いた男性を悶死させてしまうような声色で囁いた。

「おにーちゃん。もうちょっと反応してよ？」

一方通行は鼻の下を伸ばすことで答えた。

「……でも良いや。こうしてくつつけるし！」

抱き付く腕に、より力が入る。

一方通行は背中に柔らかな何かを感じつつ、密かに流れ始めた鼻からの血をそのままに、再び動かし足を始めた。知ってか知らずか、美琴は声を続ける。

「そういえばおにーちゃんさ、私が近付く時は反射無くなるよね。何で？ 愛の力？」

ここで補足をしておこう。一方通行には基本的に、無意識下で反射が働いている。下手に触れようものなら、手首があらぬ方向を向いてしまう程のモノをだ。

超能力。彼はあらゆるベクトルを操ることが出来るという力を持っているのだ。

「そオかしンねェな……」

「えっ、ちょ、……ッ！」

一方通行の背中で悶える美琴。一方通行の鼻の下が徐々に伸びていったのは、誰か気付くのだろうか。

「まアよ。お前の場合、匂いで分かっちゃまうからなア……分かつちまうんだア」

変態である。

「おにーちゃん大好き！」

「あア、俺もだ」

誰か止めてやって欲しいものだ。

第2話（前書き）

ただひたすらに（
ゝ
ω
）

第2話

夏のある日。

朝、一方通行は携帯の着信音により目を覚ます。

そして有無を言わず、携帯に飛び付いた。

相手が誰なのか。それを差出人を見ずとも一方通行には予想が出来たのは、着信音をただ一人しか設定していない、という悲しい現実があるからに他ならない。

ソファアが未来的なオブジェと化していたが、それはまた別の話。

一方通行は携帯を手に取り『美琴』という文字を見てニヤリとする。

名前がハートマークで囲まれているのには、決して触れてはいけない。

「あア、俺だ」

『おにーちゃん？ えっとね、今日会える？』

「勿論なア」

一方通行の頭には“能力開発”というフレーズが流れるが、

(削除……削除削除削除オ……！)

もみ消した。

『じゃあいつもの場所でね!』

「おう」

置いてあった缶コーヒーを飲みほすと、財布をポケットに突っ込み、一方通行は外へと出ていった。

窓から。

「おにーちゃん、ここだよ!」

ブンブンと手を振り、一方通行を呼ぶ美琴。美琴を知る人は一斉に思うだろう。誰コイツ、と。

「よォ、待ったかア?」

「ううん、今来た所だよ」

そう言われてホッとする一方通行。

それもそのはず、自宅の近くに突然地面が陥没する、という事件があったからである。

近くにいた目撃者の男子生徒とOHANASHIをした結果、その男子生徒が犯人であることが発覚。

何だかんだで時間がかかってしまったのだ。

美琴の優しさと言うべきか。一方通行の目に怪しいオーラが宿る。

口が弧を描かないよう必死に抑えていた所で、美琴の姿に疑問を抱いた一方通行。

「お前ンとこの学校、制服強制だったよなア？」

常磐台中学、美琴の所属する学校だ。学園都市でもトップクラスの学校であり、お嬢様学校でもある。

故に校則も厳しい。

学校外での制服着用の義務も、その一つだ。

しかし美琴の格好はオレンジ色のワンピース、という、何とも言い難い格好をしていたのだ。

校則違反、一方通行の疑問はそこに収束した。

「え、これ？ おにーちゃんのために来てみたんだよー？」

ズキューン。一方通行からそんな効果音が響く。

（削除削除削除オ！）

どうやら邪な考えが^{よこしま}あったようだ。必死に消している様子だ。電子レベルの緻密な操作をしているのだろう。

思考の片隅には『校則とか語尾にカッコ笑いとつけとけ』というフ

レーズが、新しく付け足された。非常にどうでも良いが。

「どうしたの？」

「何でもねェよ……」

「……？」

「……あァ……そうだなァ……どっか行きたい所あンのか？」

一方通行の言葉に顔を輝かせる美琴。

「えっと、これ見て！」

バン、と目の前に出されたチラシを見て、一方通行は納得した。

——本日開店………先着100名様にゲコタグッズをプレゼント

——

美琴は無類のゲコタ好きである。それは一方通行もよく理解していた。

「……行くんだよな」

「うん！」

元氣良く返事をした美琴は、そのまま一方通行の背中へと飛ぶ。

一瞬美琴の頭には“後輩と会う”というフレーズが流れたが、

（兄＞＞越えたら許さない壁＞＞後輩）

という不等式を即座に作り上げたので、笑みは崩れない。

また、鼻の下の伸びた一方通行の姿に、道行く人は皆目を伏せたのは言うまでも無いだろう。

結局、何事も起こらず目的地へとたどり着いた二人だった。

「うわ……並んでるね」

美琴がそう呟いた。

実際店の前には行列が出来ている。

しかし一方通行はというと。目の前に何も無いかのように、足を止めることはない。

常に伸びた鼻の下。

店員と一方通行までの間に、見事な道が出来た——人は皆避けた。

「クレープ二つ」

一方通行がそう頼むと、店員はもの凄い形相でクレープを作り始める。早く立ち去って欲しいのだろうか。

「おまつ、おたませいましたッ！　またのお越しをお待ちしつ
おりまッ——す……」

噛みまくりな店員。

一方通行は気にすることなく、クレープを受け取り。店員はホツとした様子だった。

「……オイ」

「ひゃいっ!？」

「ゲコタはどうした」

「こちらにナリマスッ!」

店員はゲコタを鷲掴み、一方通行へと差し出す。その数は二桁にいつているだろう。

数は関係無い。

要はゲコタだ。

そんなことを考えながら、一方通行は立ち去る。残されたのは、汗ダラダラの店員と、表現し難い表情をした客だった。

第3話（前書き）

超短いです

第3話

「おおお姉様ッ!? 何をしてらっしゃるのでッ!?!?」

そんな言葉が広場に響き渡る。源は、ブラウンの髪をツインテールに纏め、常磐台中学の制服に身を包んだ少女――白井黒子だった。

黒子の視線の先には、彼女が敬愛する美琴が、男性の背中に抱きついている姿。

おぶっている白髪の男性もまた、鼻の下が伸びきっていることが、黒子を叫ばせた一つの原因であつたりもする。

「なァ、知り合いか?」

「私と同じ部屋の子だよー」

「ふうん……そうだなァ、俺たちも一緒に住むか?」

「だ、ダメだってー!」

「嫌なのかよォ……」

「う……そんなこと……無いんだけど……まだ、早い、と思うんだよ」

黒子の顎がムンクの如く開いた。まさにこの世の終わりを体感したかのような表情だった。

「お……ねへさま……」

奏でるは黒子ドラム。

「オイ、ありゃあなんだ？」

「黒子は音楽が好きだね」

「M……」

「とりあえず変態だよー」

酷い言われようである。

蛇足ではあるが、奏でられているリズムは『危険な黒子』という、知る人ぞ知るアレである。

「あ、あの」

一方通行、美琴が黒子を言いたい放題していた時のことだった。

艶やか黒髪をセミロングに伸ばした少女――佐天涙子が声を掛けたのだ。

表情には、意を決して！ といった類いのものが浮かんでいる。

「あア？ お前、何様？」

「ええー、そこでそう言いますか！？」

一方通行の言い方に心底驚いた様子の佐天。そりゃそうですよ！と佐天の隣にいた少女――初春飾利は心の悲鳴を上げた。

それらを見無視し、

「黒子」

と美琴が一方通行の背から声をかけた。

「な、なんですか?」

「その二人は?」

美琴は佐天と初春へと視線を向ける。黒子は額の砂を払いながら、ああ、といった表情で説明し始める。

「昨日言ったではありませんの」

「そんな約束、忘れたもん!」

「その口調、誰ですよ!」?

「素だもん! ね、おにーちゃん?」

一方通行の背に顔を埋めながら、問いかける美琴だったが当の本人はというと。

「(鼻に集まった血流のベクトルを操作つと……)」

演算に集中していた。

「おにーちゃん……どうして無視するの……?」

「ぶふオっ」

しかし集中が途切れてしまったようだ。

「きゃああ、おにーちゃんがっ!」?

「……何と言うべきか……自業自得な気がするのは何故ですか?」

「初春……これどうすべき? 私たち」

「さあ……? とうかアレが御坂なんですよね?」

「らしいけど……うん」

「多分佐天さんと同じ心境ですよ、私」

「クレープ食べてよっか」

「そうしましょう」

こういう雰囲気カオスを、混沌と人は呼ぶのだろう。彼らの周りに誰もいない、というのが最たる証拠だ。

第4話

鼻血を垂らした一方通行の背には、頬に光るものがある美琴。

その近くには半ばトランス状態に入っているかのような黒子。

ベンチでは彼らの知り合いと思われる、二人の少女がクレープを頬張りながら、和んでいる。

周囲の人々の感想はただひとつ。

（なにこれこわい）

である。

「そういえば佐天さん」

周りのことはそっちのけ、初春は佐天に話題をふった。頬が膨れるほどクレープを口に含んでいたので、にやに？ と妙な返事をする佐天。

初春はそれに苦笑しつつ、己の伝えたかったことを告げる。

「あそこの銀行、まだお昼なのに……どうして防犯シャッター下ろしているんですかね？」

初春の視線の先に、言葉通りのものが。佐天もチラリとそれを見ると、心の中で突っ込む。

(分かってて言ってるよね、この子)

その通りである。

「で、初春。どうするの？」

「どうするも何も……白井さん、使い物になりませんし」

「何気に酷いこと言うのね……」

佐天の言い様は最もであるが、初春に気にした様子は無い。

キャラチがくない？ と密かに思った佐天だった。

「にしても、絶対何か起こってるよねー……アレは」

そう呟いて、佐天は銀行へと視線を移した。しかし発した言葉はすぐに現実となり、シャッターが爆発、吹き飛び、黒煙を吐き出し始める。

「あちゃー」

「どうしましょう……白井さん？ 生きてます？ 現界してますかー？」

「随分とまあ……」

佐天はどうにでもなれ、といった心境に。

どこか悟ったような目で周りを見渡す。一方通行たちのせいによって、一般人は少ない。

なので、そちらの面では心配する必要が無く、最大は銀行から飛び

出してきた強盗かと思われる男三人組みなのだろう。

そして、爆発、という視覚的にも聴覚的にも目立つ事象がおこったのだ。

流石に気付かないヤツはいないでしょ、と思い至った佐天は、一方通行の方へと視線を移す。

一方通行は紅に染めつつ、鼻を押さえながら、現場へと目を向けている所だった。

「おい、その」

と、トランス黒子に声をかける。

理由は単純、ジャッジメント風紀委員と呼ばれる、治安維持団体に所属していることを見越してのこと。

黒子の身に付けていた腕章が、一方通行にそういった考えへと至らせたのだ。

しかし当の本人は、

「おねへさまーっ！　ですのー、ですのん」

完全に旅立ってしまった。美琴の件が、それほどショックだったのだろう。

（どうしろってェんだ？）

鼻血は止まらないが、頭の切り替えは早い一方通行だったが。

（無視すつかア）

思い切るのも早かった。

第4話（後書き）

何かごめんなさい

第5話

「ねえねえおにーちゃん」

俺知らんしモードに入り込んだ一方通行の背を、指で突つつきながら、美琴が口を開いた。

「あア？」

「強盗、無視しちゃうの？」

一方通行の耳元でぼそり、と呟く。

鼻を抑えたその手から、新たな赤い筋を増やしつつも一方通行は答える。

「なんで、そんなことを聞くんだ？」

「えっと、何か悪そうじゃない？」

「ぶっふお……無視すのが妥当じゃねエのか？」

女性の象徴を一方通行の背に押し付けながら話す美琴に、一方通行の何かがプツンといきそうになっているのは、本人しか知らないことである。

「つかまえて？」

ぎゅっ、と何を思ったか美琴は一方通行に密着。

プツン。

赤い花火を散らしながら道路を切り裂き強盗たちのもとへとたどり着いた一方通行。

鼻血。

それが強盗たちの最初の意見であった。

しかし自分たちを追ってきた、ということに気付くと、強盗の一人が掌に小さな火を灯す。

「これでも喰らいなっ！」

そのまま巨大化、振りかぶって一方通行へと投げつけるが。

ニヤア、と半月状に歪められた一方通行の口が、その強盗の最後に見た光景となり、彼の視界は赤に染まり、意識と共に黒に染まる。

「ハクナマタタア」

謎の言語が一方通行から紡がれ始める。一部の人は知る言葉であるが。

そんな一方通行に言い知れる気持ちを抱いた、残された強盗二人。

「うあああああ！！！」

一步一步近づいてくる一方通行に恐怖という感情が浮かび始め、ついに強盗の一人が一方通行に飛び掛かった。

それにはしっかり応えた一方通行。

ダン、と地を蹴り、強盗へと肉薄する。中空へと跳び、膝を強盗の頭の位置まで持ち上げ、

「アニー!!」

兄
knee

略してアニー、分かりやすく言うなら跳び膝蹴りを放つ。『ボグウッシャア』という嫌な音を立てて吹き飛ぶ強盗。

最後の一人は腰が抜けてしまったようだ。

「嫌だ死にたくない!」

「お休み、だア」

「始末書が大変ですね」

「随分と遅くなったね……」

「何かもう、アレですよ。諦めですかね？」

「……頑張るのだぞ、初春」

初春の視界には青い空が広がっていた。

と、視界の済みに映る一方通行の存在をもみ消して、だが。

番外編 1 (前書き)

何が書きたかったんだろう。

番外編 1

2月。

まだ真冬であると言う人もいれば、もう春だとも言う人、各々に別れる微妙な季節だ。

そんな時期に、一年で一度だけの特別な日がある。

「バレエンタインデイ、チッス」

バレンタインである。

街中を歩きつつ、そんな不思議な歌を熱唱している一方通行の視界には、チョコレートやケーキといった菓子を宣伝する看板がチラチラと入っていた。

一方通行の耳に、ひたすら菓子をシスターにねだられている男子高校生^ニがいたのは別の話。

一方通行の周囲には5メートル程空白が出来ていたのは、またまた別の話である。

「バアレインタインデイー」

一方通行は歌う。

もはや公共の福祉に反していそうだが、彼の思考には1ナノミクロ

ンも存在していない。

周囲の人々は願った。

（誰かアンチスキルを呼んでくれ……）

しかし一方通行には敵わない。

一方通行が非常に迷惑なことをしている頃。

常磐台中学の調理実習室では、二人の女の子が何やら奮闘していた。

「おにーちゃんのためのチョコなんだからっ、全速全身D A！ ほ
ら佐天さんぼーっとしない！」

「のわああっ、ゴーヤはチョコに入れるモノじゃないですって！」

「おにーちゃん苦いの好きなんだもん」

「そういう問題じゃないですよ！？」

美琴と佐天である。

ことの次第はこうだ。

おにーちゃんのため！ と美琴がチョコを作り始める。すると黒子が
が全身で妨害してきたため、名のごとく炭化させられる。

炭黒子を視界の端におきながら、数分奮闘するも、あえなく挫折。

そこで、家庭料理の得意な佐天ならいける！ と思ひ至り、今に至

るという訳だ。

「とりあえずガンバロー！」

「あー！ コーヒー豆そのままはダメですってば！」

「にゃははは、おにーちゃんのためーっ！」

「殺意を感じますが!？」

「おねへさまっ！ 何をスーアッ！」

「白井さーん!!」

美琴たちが死闘という名の劇を繰り広げていたのは、ほんの僅かな時間で。

夕暮れ。

広大な敷地を持つ学園都市でさえ、バレンタインという特別な日のせいか、どこか浮かれた様子をみせていた。

「好きです」

「俺もだ」

第三者の視点というのは、時折アングルを間違えるようである。だが、そんな雰囲気は学園都市を覆っているのに違いはない。

突然だが、『しかし』という言葉がある。

それは学園都市の一角に向けられたもの。

通行人をドン引きさせながらスキップしている男性、一方通行その人であった。

「低燃費ィ、低燃費ツ、低燃ピッピッピー」

彼は最高にハイ、というやつであった。

しかもカエルのお面をしているから、尚更である。ちなみにゲコ太だ。

と、突然一方通行は歩みを、否、スキップ止めた。

周囲の人はホッと息をついたようだが、一方通行に届く音では無かったようだ。

しかし、一方通行を知る者は、更なる恐怖を予感する。

「おにーちゃん！」

元気に手を振る少女、御坂美琴だった。

通行人たちの心情は推して計るべし。一方通行と美琴のやり取りは、もはや学園都市の名物に近いものがある。尚更だ。

そして一方通行はというと。美琴を見つけてしまった一方通行のとする行動は、突撃、である。

ダダダダッ（走る）

ダンッ（飛翔）

シュルシュルッッ（亜空間スピン）

ボグウアッシャアアア（地面の最期）

シタッ（きおつけ）

サッ（両手を差し出して）

ピシッ（前傾姿勢）

「美ィィィ琴オオ!!」

「きやうつ、もうおにーちゃんってば」

「わりィ、理性がプツンだ」

はた迷惑な人間である。

「でもまあ」

「あん？」

「ちゃんと時間守ってくれたんだね」

「当たり前だ。その辺はツリーダイヤグラムにま負ける気がしねエ」

ツリーダイヤグラムが、学園都市最高のコンピューターであることを知っているのだろうか。

一方通行だと洒落にならない。

だからか、少し距離をとりたくなる人も少なくないようで、通行人は少しずつムーンウォークで撤退を始める。

何とも意味不明な行動である。視界の隅にそれを捉えてはいたが、美琴は無視するかのように口を開いた。

「ねえおにーちゃん」

「ン？」

「公園行こ？」

「あ？ あア勿論だ」

「はいこれ」

公園へと到着してすぐ。美琴は小さな包みを一方通行に差し出した。

「チョコレートか？ それともチョコレートかア？ さらに裏をかいてチョコレートだな？」

「そのベクトルをねじ曲げて、チョコレートだよ！」

「……」

「……えと、電波？」

「まア、マジにありがとーよ！」

言葉と共に、一方通行は美琴に抱き着いた。恐らく誤魔化し、の意味が大きかったというのは禁則事項である。

「えへへ」

満更でも無さそうに、頬には赤みをさす美琴。

「食べてみて」

ずっと一方通行から離れながら、包みをから、そつとチョコレートを取り出し。

「あーん」

取り出したチョコレートを一方通行の口へと運んだ。

「ぶなゝアアアアアアッ！！？」

「セロリ、入れてみたんだよ？」

「良いねエ、最ッ高だネエ！」

バレンタイン。

様々な意味で、一方通行の記念日となった。

第6話

「レヘルアッパーだア？」

「おにーちゃん、濁点抜けてるって」

「レペルウ？」

「えっと、素？」

「どっちが濁点とか、分かんねエ訳じゃねエからな？」

「……」

「アアアアッ!？」

一方通行が吠え猛る。

場所が街中の公園であることから、公共の福祉に反しまくっているが、もはや彼らにそういった常識が通じないことは周知の事実だ。

公園にいた他の人々は、皆悟りきったような表情をしているのは、触れてはいけない点だろう。

さておき、現在一方通行の話題に挙がっているレベルアッパーについてだ。

吠えた一方通行に対して、美琴はそれがいつものことのように受け止める。そして話題を元に戻した。

「でね、最近レベルアッパー使って力をつけた連中が暴れてるんだって」

「へエ……なんつーかよオ、馬鹿だなそれ」

「……でも軽く見ちゃいけないらしいよ？ 黒子が言ってたし」

「黒子オ？ あアあのドラムちゃん」

「そう、それ」

本人に悪気が無いから、悪口にはならないのだろうか。どちらにせよ、黒子が聞いたら、アツチョンブリケをしてくれるだろう。

アツチョンブリケをする黒子、似合いそうだから怖い。と、美琴はひっそりと思った。

「ともかく、増えてるってだけだから」

「ん？ じゃあナンで言ったんだ？」

「もしものがあつたら、っていう」

美琴はあくまで電気系統のトップなだけ。もしもの話として、テレポーターに使用者がいた場合は流石に対応しきれない場合がある、という意味合いが込められていた。

一方通行は論外だが。

瞬殺という仕返しをしてくださる。

「あア、なら心配ねエ。お前に何かあつたら、犯人には世紀末を見せてやるつもりだからよオ」

これほど頼りになる言葉は無い。色々な意味でだ。

「きゃー、おにーちゃんさっすが！」

「ツエーイ！」

不思議な歓声を上げる一方通行とは別に、少しばかり真剣な表情になる美琴。

「マジな話ね、被害とか凄いことになってるから……」

「だからア？」

「しばらく……その、一緒の部屋になってほしいの」

「イエエアアアア！」

公共の場に、変態の歓声が響き渡った。その喜び具合は、アンチスキルと呼ばれてしまう程だったという。

第7話

前日の会話から、美琴が一方通行の部屋に泊まり込むことになった。しかし、美琴は常磐台の寮に住んでいる。許可云々の前に他の体面的な問題が生じてくるのだ。

一方通行対常磐台女子寮長という、あってはならないようなタッグマッチが実現したのは寮内でも有名だったりしている。

何はともあれ、一方通行のゴリ押しによって一方通行宅への泊まり込みが認められ、今に至っているのだ。

「なァ」

「うん？」

「どっちが先に入るつもりだァ？」

「おにーちゃんが先に入っているよ」

同棲した場合の一つの問題点。同棲、と表現するとあらぬ誤解を招きそうだが、風呂である。

普通の考えでいけば女性が先に入るのが妥当だろう。がしかし常識が通じないのが彼らである。

「ンや、俺的には、そっちが入って欲しいぜエ」

「いやいや、あたしはおにーちゃんが先に入った方が」

「おめエが」

「おにーちゃんが」

人はこれを無限ループという。譲り合いのループ程面倒くさいことは無い。

また、それぞれに思惑があるからこそその現象であることに違いは無い。今回に限っては、互いに心中を明かせば待っているのは破滅だ
が。

（残り汁を頂くぜエ！）

（絶対残り香を嗅ぐんだから！）

類は友を呼ぶ。

そして人は他人によって、環境によってその性格を変えてしまうらしい。誰の言った言葉だろうか。これ程彼らに適する言葉は無いだろう。

嫌な評価であるが。

一方通行、美琴共に譲ろうとせず埒が明かない、ということで最終的に譲ったのは美琴であった。

名前の通り“一方通行”。ゴリ押し問題児である。

美琴が風呂場へと向かい、入ったことを確認すると同時に一方通行の頬がつり上がる。

「クフフ……クヒ、フヒヒ、アヒヤヒヤヒヤ」

もはや見ていて恥ずかしいレベルで笑う一方通行。彼の脳内では、一体何が起こっているのだろう。

そのまま一方通行は立ち上がると、ソファの下からノートパソコンを取り出した。スリープ状態だったのだろうか、デスクトップに光が灯っている。

その流れのままネットに接続。

そしてとあるサイトを開いた。文字の羅列、いわゆる掲示板と呼ばれるモノだ。一方通行は再びフヒヒと笑うと、キーボードを叩き始める。

カタカタという音が静かな室内に響く。

やがて書き終えたのだろう、強くエンターキーを叩いた。

『（21）..おまいら、ついに自宅まで呼び込んだ』

そう、打ち込まれていた。（21）とは彼にとって何を意味するのだろう。その答えは、知る人は知っている。

『鎚帝..おおあああ！　いてまえ、やっちゃまうにゃー　初夜の感想よろり』

「アアアアッ!！」

『蒼髪の耳飾り..んなアホな　早すぎるで、このロリコンめ』

「ロリじゃねエエー!!」

ネット上の友達といった所だろうか。いや、むしろ変態仲間だろう。一方通行の書き込みに早速反応する猛者たちがいた。

それより問題のあるのは、一々書き込みに反応する一方通行だろう。彼の声のデジベル指数を測ってみたいものである。

それほどの大声。

遠慮なく張り上げられた声は、当然響く。

ダダダツと廊下を走る音がしたかと思うと、一方通行のいる部屋の扉がバタンと開いた。

「どうしたのにおにーちゃん!？」

よくあるトラブルである。一方通行の視界には、色々と問題のある光景が飛び込んだ。

赤い花が咲いた。

『鎚帝…アイツの書き込みが途絶えたにゃー?』

『蒼髪の耳飾り…アニメみたいな展開やないか?』

『鎚帝…殺せ』

『蒼髪の耳飾り…:…』

第7話（後書き）

ロリコン？

違う、彼はペド……いや、考えたら負けだろう。

第8話

一方通行が赤い花を咲かせたのは、既に一週間も前の出来事となっていた。

ちなみに一方通行の部屋に気まずいどころか、触れたくないとさえ思える空気になっていたらしい。『耐性無さすぎじゃない!?!』とは美琴の言葉。もうツツコミを入れてはいけない。

少し違う表現かもしれないが、一方通行にとって黒歴史となったのには違い無いだろう。

そんな一方通行であったが、何を思ったか、現在彼はコンビニの成人向けコーナーの前に立ち尽くしていた。

モアイのように顔に影が落ちているのは何故だろうか。彼に対する疑問は尽きない。

店員がチラチラと見ている。何したいんすか、と腹が異様に出っ張っている冴えないおっさんの顔は、そう言いたげだった。

俗に言う深夜バイトだ。今更ではあるが、時刻は日付が変わってから一時間は経っている。

そんなものは思考の外、一方通行の脳内には、とあるフレーズがグルグルと回っていた。

（耐性耐性耐性耐性エ……）

彼なりにショックだったのだろう。しかしあの時の場景を思い出し、一方通行は鼻を手で覆った。

（サクランボエ……）

指の隙間から赤い筋が垂れる。一方通行は何故か気付かないが、おっさんは違うようだった。

（最近の若者は……）

おいおっさん、とツツコミたいところだ。

ふと、一方通行が動く。

空いていた手で『ロリータ天国と地獄』というタイトルの本を一つ。彼は直感で選んだらしいが、それはそれで大問題だ。

（何というセンス……コイツ……出来る……）

おっさんの思考にも問題があるようだが、そこは論点ではない。

一方通行は左手に本、右手を鼻へ、という不思議な格好のままカウンターへと向かう。

そこで店員のおっさんは気付いた。一方通行が鼻血を滝のように垂れ流していたことに、だ。おっさんの脳は高速で思考を巡らせ始める。

（ウブ過ぎるとはいえ……いくらなんでも鼻血は行き過ぎではないか？ いや、そこは彼の想像力……否、妄想力が長けているのだろうか……）

深夜のコンビニの裏事情。中年店員の思考はやバかった。

おっさんがそんなことを考えているとは露知らず。一方通行は謎の葛藤を繰り返しながら、その重い足を動かしていた。

（俺にイ……許されんのか？）

ナニがだろうか。

「さアてエ……買っちゃったゼエ……」

（ツエーイ！ 何だってンだア！？ 本一冊でナンでテンションがハイになるンですかア！？）

口ではそんなことを呟きつつも、一方通行の思考は、初めてエロ本を拾った小学生のようなモノであったのは、何とフォローしてやれば良いのだろうか。

街灯に照らされた一方通行の顔は、見る人をドン引きさせるレベルであったことを本人は知らない。

追い討ちをかけるかのように、無意識の内にスキップで移動していた一方通行。ホラーである。

通行人にトラウマを振り撒きつつ、ついに自宅へとたどり着いた一方通行。

「あア？ 俺ア電気は消したハズなんだけどなア……まアいつか」
リビングに灯る明かりを見て、そう呟く。――彼は重要なことを忘れていた。

一方通行の思考は「ロリータ」という言葉で埋め尽くされていたからこそ、気付くことが出来なかったのだろう。

後に「アクセロリータ」と呼ばれるだけはある。

一方通行は奇妙な形をしたソファ―にドツカリと座り込むと、おもむろに本を取り出した。

パラリ、捲って。

紅い花が咲いた。

リターンズ。

「おにーちゃん!？」

「ウヴオエアアッ!? みっつ、美琴? これは違うんだ!」

「何が違うのよ！　おにーちゃんのえっち！」

「エッチィー！」

「どうして……どうして私じゃないのよ！」

「耐性をつける為だァ！」

「耐性って……」

「ほらァ……この前のよォ」

「……じゃ、じゃあ私で……れ、練習してみる？」

「ダニィ！？」

この後彼らに何が起こったのだろうか。流れはそちらに向かっているのだろうか。

考えてはイケナイのである。

第8話（後書き）

むう……

宮城は大変デス

今回の反省（？）

一方通行はロリとかペ r yとか、そんな生易しいものじゃなかった
ようです

第9話

「おはよ、おにーちゃん」

「あア……もう朝ツてかよオ」

モゾモゾとうごめく布団の中から、そんなやり取りが漏れる。

昨夜一体何があったのだろう。美琴の頬に僅かな赤みが差していることから察するしかない。やりやがったな、とクレームをつけたい所である。

一方通行はそんな美琴の顔に目を向けた。がしかし、美琴は顔を赤に染め、口元を布団に隠してしまう。

「どうしたア？」

「いや……その、何でもないって」

「おオ？」

寝ぼけ眼な一方通行は、その脳もまた休止状態にあるらしい。都合の良い男である。

「そ、そういえばね！」

わたわたと手を振りながら、慌てたように喋り始めた美琴。

一方通行は、何故そんなに慌ててるンダア？ などと考えつつも、目を合わせて先を促させた。

「今日常盤台に後輩が来ることになっててね」

「またア、ブッ飛んだ展開ですかい」

「ま、まあ、そう言わずに」

美琴が言うには、この間僅かながらも、某クレープ店の前で会話を交わした二人組の女子中学生が「常盤台の見学をしたい」との話を黒子から聞いたそうだ。

無論、美琴は一方通行と共にいるつもりだった。しかし黒子という変態が立ち塞がる。黒い瘴気を纏われれば抵抗は出来ない。

知る人ぞ知るデスタムーアだ。

美琴は言い終わると同時に、言い切った。

「とゆー訳で行かなきゃマズイ気がするの……」

最近黒子が邪魔で仕方がない、と付け加え、寝ぼけたままの一方通行を他所に制服を羽織った。

「じゃあ、行ってくるね、おにーちゃん」

「おう、行ってらっしゃアアアい」

「リアルサクランボエー!!」

美琴が出ていってから数分、遅めの起動を果たした。そして咆哮である。

「つーか置いてかれた」

ふと、そう呟いて真顔に戻る一方通行。

彼の心情は正直どうでも良さそうだ。しかし残った事実は、近所迷惑常習犯という物悲しいレッテルだけである。

——と、何を思ったか、真顔のままベッドの上で正座をし始める一方通行。

そして静かに瞼を閉じた。

少しの沈黙が流れ、一方通行は勢いよく目を開く。

「追うぜエ！」

散々時間をかけた割りには、実に意味不明な答えが出たようだ。時間の無駄遣いの模範である。

何はともあれ、一方通行の常盤台侵入は決まったようなものだ。侵入、というと語弊はあるが、一方通行には当てはまってしまう不思議。

また、常盤台といえば女子校だ。

男子禁制の地といっても過言ではない。——しかし特殊な人種には、

それはプラスとして受け入れられるらしい。

一方通行の口角がつり上がる。

朝の日差しの明るさには不釣り合いなホラーフェイスだったという。

第9話（後書き）

宜しければ、感想を。

第10話

「わあ、お嬢様度合い、こまりマックス！」

中世の町並みのような景観である学舎の園でのこと。頭に花飾りを乗せた少女――初春が、そう叫んだ。

「それ作品ちがうからね？」

それをたしなめる佐天。少々不思議な表現ではあるが、いつものタッグであった。

「リミッター解除ですから！」

「自重なさい、花瓶」

気だるげに、かつS気質な微笑みを浮かべて、ツインテの少女、白井黒子は初春に、言葉を投げかけた。

「流石白井さん、地味に酷いですね！」

「佐天さんこそ、何故スカートの裾を掴んでらっしゃるの？」

「え？ そりゃ、リミッター解除中らしいし」

散々な言われようである。

「リミッター解除中いえすっ！」

当の本人がこれでは仕方ない。

余談だが、ここは学舎の園という、通称お嬢様学校が集まる学区だ。

様々な意味合いの視線を頂いていたらしい。

そんな世評は思考の外、バックに花のエフェクトを侍らせながら、徐々にヒートアップ、否、ギアアップしてゆく初春。

面白がるような、それでいて呆れたような顔を初春に向ける佐天。指を指しつつ、黒子を振り返る。

「ほらー」

「こいつ誰ですか？」

黒子は、花の茎に付く油虫を見るような目で初春を見やった。文学的に、とんでもない表現ではあるが。

しかし、期待(?)を裏切らなかった初春。

「花瓶です！」

右腕を振り上げ、胸の所まで戻す。この動作を繰り返しながら、高らかにそう叫んだ。

常盤台に密かに出前にやって来ていた、記憶に新しいおっさんは、その光景を見て口をあんぐりと開けた。

(えーりん!?)

「……どこのリミッター外してるんですかね？」

「佐天さん、考えてはいけませんの」

腕をブンブン振りながら笑う初春に、唯一の常識人である佐天は苦

笑いをする。

今回ばかりは黒子も常識人サイドであるようだ。佐天に同調して、非常に面倒臭そうだ。

「……あははー、もうアレですね。やっちゃって良いですか？」
どこか達観した様子の佐天はそう言いつつ、スカートの裾を掴む手に力を込めた。黒子はサラリと肯定する。

「ヤッちゃってくださいな」

「リミテ——アッ！」
「デジャヴですの」
「奇遇ですね」

あくまで未来の事象である。

第11話

「俺、参上エ！」

初春が腕を振り回すことを止めず、はや三分も経過していた時のこと。一方通行が空から降ってきた。

「ああ！　いつぞやの白髪変態ですよ！」

まず空からの登場に突っ込むべきだが、黒子にはその余裕が無かった。というのも、一方通行と初めて会った時の事柄が、黒子の脳内にリピートされたからに他ならない。

しかし一方通行は某仮面のキャラクターのセリフを決めて、達成感に包まれていたので気付かない。

「無視ですよ！？」

騒ぎ立てる。

周りの人々の視線を集める。

これらは、もはや通例となっていた。

一方通行は周りの視線を集めていることを、決めポーズのおかげだと思っているのか、

「おばあちゃんは言っていたア……」

人差し指を天に向け、そんなことを言い始めた。シリーズは違うのだが。

完全に自分の世界に入り込んでいる一方通行。完全に除け者にされている黒子は、より一層声を上げた。

「貴方のおばあちゃんはもうどうでも良いんですの！ 私の質問に答えてくださいませんか！？」

ようやく届いたのか、一方通行が無意味に目を細めて黒子を見つめる。

彼の頭は、思考の内に流れる記憶の渦から、頭を地面に叩き付けていた黒子の姿を引き出したようだ。

「ドラムかア」

「はあ！？」

珍妙な答えを導き出した一方通行。

そんな彼に、佐天が声をかけた。初春を見かねての行動である。

「あの、こんにちは！」

「あア？ お前何様？」

「ふ……それは想定内ですよ！」

「何言ってんだ、オメエ？」

「オメエじゃないです、佐天涙子でっすよ！」

「……涙子ちゃん」

「うおお、予想通りのブツ飛び回答！」

「まァー良ィや。涙子チャンよォ、何か用かァ？」

「あ、いや。ネタとして話しかけてみました」

「はァ？」

「お気になさらず！ では！」

何故か逃走する佐天。

後に、その理由は明らかになるが、今はただの意味不明な行動である。

一方通行も、まさかの急展開についてゆけない様子だった。

顔文字で表すと、ポカーンという擬音が似合いそうな表情の一方通行に、次は自分の番だと黒子は再度話しかける。

「さて、ですの」

その言葉に、一方通行は面倒くさそうに反応した。具体的に言うならば、振り向くだけなのに対し、10秒掛かったくらいに。

「いくらなんでも」

「めんどくせエのを精一杯体现した結果だツつの」

「貴方は……一々めんどくいですのよ」

「気にすんな。それが俺ってもンよ」

一瞬黒子は殺意を抱いたが、無理からぬことだろう。一方通行の口は、アヒルのような形になっている。

平常心というフレーズを脳内にデカデカと掲げ、黒子は一つの咳払いの後、無理矢理笑みを浮かべて語り始める。

「……では、流石に真面目に話を進めますわよ」

「ポポポポーン」

「……もう良いですわ。勝手に進めますわよ」

こめかみに筋が浮き上がっているのは、気のせいではない。

「貴方は、この間お姉様をオブっていた」

「あア、柔らかかったぜエ」

「んがッ！ ……平常心ですの……」

一方通行の鼻下の様子に、黒子のイライラは着々と貯まってゆく。

本人も知らぬ内に、鼻息が人外になってきているのが、さらに拍車をかけていた。

「本題……ですの」

「おウ」

一方通行は、逆立ちをしながら頷いた。

「貴方は、お姉様の何ですの？」

「聞きてェか？」

いきなり真顔になった一方通行に、思わず息を飲んだ黒子。

「……本当にかア？」

「勿論ですの」

「本当の本当に？」

「……ええ」

「誰にも言わねェか？」

「言いませんわ」

「もし言ったら、1000万な？」

「……小学生ですよ？」

「あ、聞きたくねェんだ」

「い、いえ！ 分かりましたわ、それで良いです」

「……そォか。実はな」

「彼の者、深窓の姫君。その輝き、古より伝えられし月光花の如し」
「……！！？」

「我、月光花と共にあらんことを望む」

「ああ……痛い、痛いですよ」

「つまり従兄弟だァ」

「もう色んな意味で、お見事」

「ありがとうなぎィ」

忘れてはいけないのは、逆立ち状態であること。

よく分からない形で、二人の会話は閉じられ、新たな乱入者が現れるまで、互いに一言も発することは無かった。

第12話

「おにーちゃん！」

黒子と一方通行が会話を終えてから、数分の時が流れた頃。

御坂美琴の快活な声が、学舎の園に響いた。時刻にしては未だ昼。通行人はそれなりだから、当然の如く注目を浴びる美琴。

彼女は、常磐台のエースだ。常磐台と言えば、学園都市でもトップクラスの学校だ。学舎の園内でのトップの座を冠している。

また、学舎の園は、独立したような学区となっており、一つの世界だ。

よって、エースともなれば、憧れの対象にも成りうるし、噂の格好の的でもある。つまるところ、かなりの有名人。

そんな人物が、スキップをしながら、一人の男性の下へと向かってゆく。それが問題にならない訳がない。

彼女の周囲に、沈黙が訪れた。

「「えーりん！ えーりん！」」

初春と中年のおっさんは例外だが。

美琴は、周囲が静かになったことには一切興味を抱かず、一方通行

へと頭から飛び込む。

周囲の空気が凍り付いたが、問題の中心である一方通行、美琴、黒子は気にした様子はない。とんでもない胆の持ち主である。

「よおう、美琴か」

飛び込んできた美琴を、一方通行は能力を使わずに、真正面から受け止めた。

「おにーちゃんの匂いがしたと思ったら、ホントにいたよ!」

「追ってきたンだぜエ」

「勿論、会いに来てくれたんだよね?」

「それ以外に何があるってんだ」

「だよねーっ!」

一方通行の腹にグリグリと顔を押し付ける美琴。

黒子から色が消えた。

同時に、周囲から息を飲む音が幾つか鳴った。なんという話のネタ……!と。

そんな時である。

「s e x y a n d」

一人の少女が現れた。

「エ! キゾチックエ」

少女は、黒子と同じ制服を着ており、常磐台の生徒であることが窺える。

右手に持った扇で口元を隠しつつ、一秒に一度の間隔で身体をくねらせながらの登場。

（きめえ……）

満場一致の感想である。

世評がとんでもないことに変化しているとは露知らず。その少女は、色の抜けた黒子に目を向けた。

「あーらあ？　そこにいらっしゃるのは白井で無くて？」

「……ハッ！」

黒子に色が戻る。と、同時に声の主へと顔を向け、面倒くさそうに顔を歪めた。

「ああ……婚^{こんごう}后光子^{みつこ}ですの」

婚^{こんごう}后と呼ばれた少女は、フンと鼻を鳴らすことで答えた。

わざとらしく、道のど真ん中で抱き合っている美琴と一方通行を見比べ、黒子に疑問を呈する。

「アレは何でして？」

「私では理解出来ない、超次元ゾーンですわ」

「まあ……分からなくてもいいですわね。サイキックかしら」
「私に聞かないで頂けますの？」

いつの間にか、諦めモードに切り替えていた黒子。

その様子に、扇をパタンと畳み、少し考えるそぶりをする婚後。

「覚醒……？」

「知らない人は、知りませんのよ、ソレ」

「そんなことは置いておきましょうか」

「貴女が言い出しっぺでしょうに」

そんな会話が交わされた後のことである。自分たちの世界から帰還した、一方通行と美琴が婚後に気付き歩み寄ってきたのだ。

婚後は美琴の顔を見ると、あれ？ と小さな声を溢した。浮かんだ疑問を、そのまま言葉にする。

「御坂美琴さんでなくって？」

「は？ そうだけど、アンタ誰よ」

その返答に目を丸くした婚後。彼女の脳裏には、おにーちゃんと呼びながらスキップする美琴の映像が流れる。

婚後は頭を振り、その映像を揉み消した。そして、目の前の少女が、常磐台のエースであることに集中する。

営業スマイルとでも呼ぶべきか、婚後は笑みを顔に張り付けた。

「初めまして。私、婚後光k」

「はいはい売り込み乙。もう帰って良いわよ、じゃあね」
「なッ……!？」

思いもよらなかった返答に、婚后は絶句する。美琴はといえど、一方通行と会話を始めていた。

婚后はしばらくフリーズした後、一方通行へと意識を切り替えた。

「そちらの方、初めまして。婚后m」

「あー、あアー、きッこえませエーん」

「ええええー」

「美琴、あっちにケーキ屋があんぜエ」

「え、ホント!？」

「さアて、逝きますかア。勿論驕りだってばよオ」

「わーいやったー!」

腕を組み、スキップで駆け出した二人。

「超次元ゾーンですの」

「的確な表現でしたのね……」

悟りをひらいた二人。

「「えーりん! えーりん!」」

息のピッタリな二人。

これほど理解に苦しむ状況は、存在しないのではないか? という
感想を、通行人皆が思ったという。

「先読みして、犯人を捕まえてみました！」

佐天が、一人の少女を引きずってきた。が、誰も何のことだか、理解出来なかったそうだ。

第13話

学園都市は、夜も明るい。それが丑三つ時であろうと、光が絶えることは無い。

しかし、光があれば影もある。という使い古されたフレーズが存在する。それは学園都市にも当てはまった。

林立するビルが生み出すのは、光は届かず誰かが近付くようなことのない、裏路地でのこと。

日本では滅多に聞くことの出来ない、パン！ という乾いた音が響いた。

その始まりの音を皮切りに、断続的に音が追従する。

命を奪う道具、銃。

今回はマシンガンという形状をとっている。そして、その持ち主は少女であった。

軍用のゴーグルを身に付けており、夜の闇に、それは薄暗く光を放っている。

彼女はたった一つだけの標的を、ゴーグル越しに捉えた。銃を持てるような体躯では無いのに、照準を合わせる動きに淀みは無い。

——カッン。

引き金を引く音は軽い。が、続いた音は、到底軽いとは表現出来ない。

（今度こそ殺った……！）

少女の目に、勝利の光が宿る。しかしそれは、銃口が吐き出す煙が晴れた時、光は失われた。

ゴースト越しで映る、白い髪、赤い瞳。

少女は戦慄した。化け物だ、と。

ゆらり、と。白い悪魔は一步踏み出す。瞬間、少女の目の前にその身を晒していた。

少女は息を飲む。そして自身の終わりを感じ、目を閉じた。

数秒の時。少女は衝撃がやって来ないことに疑問を持つ。

そして、その答えは、音という形をしていた。

「お持ち帰り、だア」

「ええええー……」

第13話（後書き）

この作品にシリアスは存在しません。

第14話

一方通行の問題発言からは、数日という時を遡る。

その時一方通行は、とある研究機関から呼び出しを受けていた。

学園都市の頂点に君臨する一方通行。だからこそ、呼び出しがかかることは、決して少なくない。

内容を簡潔に説明してしまえば、学園都市の存在意義でもある、超能力に対する研究、開発。

一方通行は「美琴とじゃれてエ……」と渋ったが、これに関しては断ることが出来ない。

一方通行は、自身が出来る限りの不機嫌さを顔に浮かべて研究所へと向かっていった。

具体的に言うならば、眉毛は八の字を描き、目は全開。小鼻を膨らませ、歯茎が見えるまで口角を引き吊り上げていた。

トラウマの権化だ。

研究所は、市街地に堂々と建っている訳ではない。ビルの並木からは離れ、言葉で表すなら、郊外に位置している。

何故そのような位置取りをしているのか、と聞かれ、正確に答えられる人は学園都市の闇に関わっていると言えた。

一方通行は頬をピクピクとさせながら――無論疲れて――目的の場所にとどり着く。

嚴重な警備が敷かれた研究所の、重いゲートを前にして、やっと顔を元に戻した。

ポケットから携帯を取り出し、開く。待ち受けに設定されている、美琴の写真を見て、一方通行は何を想像したのか、鼻の下を伸ばす。

ゲートの管理人をギョギョツとさせながらも、手続きを済まし、指定された部屋へと向う。

時折叫び声のようなものが耳に届くが、美琴の『自主規制』なポーズや『イエアアア』なコスプレを思い浮かべていた一方通行には、音として捉えられていなかった。

一つのドアの前で立ち止まる。取立て目立つような場所では無いが、107とだけ書かれたプレートが、目的地であることを示している。

（早く終わらせてエ……そんでルパンダイブするんだア……）

一方通行はドアを蹴破った。

荒ぶる一方通行に、中にいた研究員は慌てたが、蹴破った途端にピタリと動きを止めた一方通行に、いくらかの落ち着きを取り戻す。

ドアの向こうにあったのは一方通行を沈黙させるほどのもの。それはそれで、チートアイテムであるかもしれない。

そこには、ガラスの容器があった。

しかし、それだけでは話にならない。

明らかに化学反応を起こさせるようなサイズではなく、もっと大きな、人がスッポリと入ってしまうようなサイズのものが。

普段の彼なら「人体実験テラワロスエ」と切り捨て、最愛の妹の姿を妄想しているはずなのだ。

しかし、彼は沈黙した。

（なん……だと……）

一方通行の視界を、一つの物体が支配していた。

近くの研究員が、ポカーンとしている一方通行の様子に、クツクツと笑う。

しかし。

（裸の……）

彼は。

（美琴だとオ……！？）

期待を裏切らない。

第14話（後書き）

もう少しだけ、この謎作品にお付き合い下さい。

宜しければ、感想を。

第15話

「どういことだアッ!？」

呆然とした様子——あくまで外見だけだが——だった一方通行は、突然そう叫び、近くにいた中年の研究員にダンツと近寄る。

効果音の通り、能力の無駄遣いである。一瞬にしてその研究員に肉薄した。

目は血走り、鼻息が異常なまでに荒い一方通行が突然視界一杯に広がる。標的となったその研究員は、思わずヒツと小さな悲鳴を漏らした。

一方通行は研究員の胸ぐらを掴み上げ、ガラスの容器——培養器を指差し、唾を飛ばしながら、疑問を言葉にする。

「ありア、何なンですかア!？ 俺の記憶によオ、これにそつつつくりな人物がいるンですがア!」

そう言いながら研究員を揺さぶる。能力を行使しながら、である。

研究員の顔は、一方通行の唾だらけでベタベタ、そして揺さぶりの衝撃でカツラがずり落ち、擬似バーコード頭が露になっていた。

同室の研究員の一人が、吹くのを我慢したが故に咳き込んでいたのは別の話。

「さア答えろオオオ」

「ひいつ、命だけはっ」

一方通行は声を発しながらも、揺さぶりを止めることは無い。被害者である研究員は、チキン思考なのか、命乞いを始めている。

抑えた口から漏れる笑い声。これは周りの研究員のものだ。ここまできると、標的にされた研究員が可哀想に思えてくる。

そんな外の世界は知らんぜよ、とでも表現した所だろうか。一方通行はひたすらに揺さぶり続けていた。

「オオツーオオオオツ」

「きゃああああー！」

研究員は意識を手放した。

「あア、面白かったア」

その言葉に同意の声が上がるものだから、恐ろしい。

と、研究員の内から、一人の代表かと思われる男性が歩み出てきた。やっと終わりましたか、と言いたげな表情。しかし目尻にうっすらと涙が浮かんでいた。

一方通行は斜め45度で睨み付ける。

「その角度は一体……」

「アニメにあやかったぜエ」

代表はポカンとした様子だったが、一つの咳払いをする。

本題に入るのか、表情を引き締める代表。一方通行は対抗して、自らの顔を両手で押し潰した。

「……何がしたいんですか」

「俺の腕にゃあ、妖精が宿ってンだってばよオ」
「話を始めますね」

こいつ馬鹿だ、という言葉は飲み込み、無理矢理話を進めようとする代表は正しい。

助手に二枚の書類を持ってこさせ、バインダーに挟み、片方を一方通行へと手渡した。

頬から手を離して、引つたくるように受け取った一方通行。代表は嫌な顔はせず、喋り始めた。

第16話

「つまりよオ」

代表の男が一通り話終えた所で、一方通行はそう口を挟んだ。

「このアクセロリータ様をよオ、てめェらの欲望の為に人殺しになれ、ってかア？」

どこか違う発音になっていたが、もう誰も突っ込まなかった。

内容からして、普通なら暗く重い内容であるのにも関わらず、室内の空気は何とも言い難い軽いものになっていた。

代表は一瞬どう反応したら良いのか分からなかった様子だったが、こほんと一つ咳をする。

「……まあ、簡単に言えばそうなりますね」

簡単に表現するならば、一方通行をレベル6にしてしまえ、というのが話の内容だ。

強さの基準となるレベル評価。現存するのは5までであり、基準は単独で軍とやりあえる、というものだ。

意味合いから必然的に、レベル5に該当する人間はほんの一握り。実際その数は一桁だ。人口230万の内で、一桁。それだけでレベ

ル5というのは様々な意味で力を持つ。

そこでレベル6という評価があるでしょう。5でさえ、それほどの意味があるのであれば、6はどうなるのだろうか。言うまでもない。

また一方通行は、数少ないレベル5であり、尚且つ序列で表した場合、一位に輝く人物である。

尤も、本性には触れてはいけませんが。

「そんで、これを使うってのか」

一方通行は、培養器へと目を向けた。

ふよふよと漂うそれ。

いわゆるクローンである。それも、一方通行の最も近い所にいる美琴のもの。一方通行に思う所は多々あった。

人間のクローンなど、普通なら倫理的な問題として認められないであろう行為。それを認めてしまう学園都市に、一方通行はほんの少しだけ恐怖を抱いた。

（待てよオ……？）

だが、それは一瞬のこと。

（このクローン……って）

もし効果音が付くのならば、某ニュータイプのアレが妥当だろう。

一方通行は良からぬことを思い付いたようだ。

（ケヒッ……）

漂うそれは、研究員にとっては物にしか過ぎないのかもしれない。服が着せられている訳でもない。

（クフヒッ……）

ガラス越しとはいえ、一方通行には十分過ぎる刺激。一方通行は脳内に色々と分泌されているのを、ノリで感じ取っていた。

目の前に立つ代表に表情を悟られないように俯く。それもそのはず、着々と鼻の下がお見せ出来ない状態になってゆく一方通行。

「では、この実験を受けていただきますね？」

確認を問う代表。

「……むしろよォ」

かすれた声で反応する一方通行。俯いているため、その言葉に込められた感情は代表には伝わらない。

代表は「なんでしょう」とだけ答えた。それを聞いたと同時に、地面に膝をついた一方通行。怪訝な表情を見せる研究員一同はそっちのけで、一方通行は正座をした。

そして。

「むしろやらせてくださいッ！　お願いします……！！　やらなかったら僕死んちゃう！」

本能が産声を上げた。

いつもの口調は何処へ。

そして、一方通行の脳内には、己の楽園が構築されていたことなど、誰が気づくだろうか。

（ツエーイ！　ツエーイ！　ツエーイ！　ツエーイ！　くかき……
こかくきかかーッ！　美琴アイルランド！）

国名になっていることは、誰にも突っ込むことは出来ない。こうして、物語は一方通行にとって非常に都合の良いスタートを切ったのだった。

第17話

「ねえおにーちゃん」

「おーウ」

夏の日差しが顔を見せ始めていたとある金曜日のこと。学園都市に点在するカフェの一つで、一方通行と美琴は涼んでいた。

カラカラとオレンジジュースをかき混ぜながら、頬杖をつく一方通行。その視線は、どこか宙をさま迷っていた。

美琴の問いかけに対しても、気の抜けた、人をイラつかせる声を発するだけである。

美琴はジッと一方通行を見つめてみる。すると、うつすらと隈が浮かんでいることが確認出来る。

「寝不足？」

「あア……」

「実験だっけ？ 最近電話に引き摺り回されっぱなしだね。昨日も夜中に呼び出されていたでしょ？」

「おう。実験実験」

幾らなんでもおかしい。いつもの反応ではない。美琴の知る一方通行は本能に身を任せた魂の動きを見せるハズである。

その実験に何かしらの問題でもあるのではないか、と思わずにはいら

れない美琴。

「実験……クフツ」

（ビンゴォッ！）

その考えは的中したようだ。

美琴の脳内で「家政婦を見た」のメインテーマがながれる。

心の内で、尾行することを決めた美琴であった。

「実験開始まで、残り2分43秒です。準備などはよろしいですか？
と、ミサカは確認してみます」

今夜は雲一つ無い。

透き通る空気に、掠れたような、それでいてどこか機械染みた声を発する少女がいた。

街の明かりによって照らされた空ではあるが、星の光は届いている。卵のような月が学園都市郊外に位置する、とある廃屋を照らしていた。

破れた屋根の隙間から、スポットライトのように降り注ぐ月光。これから始まる舞台の主役は、色素の抜け落ちた白髪を持つ、白き変態。

この場合の変態とは、生物学的な意味ではない。ある一定のラインを越えた、ある意味でのキチガイのことを指していることを捕捉しておこう。

白き以下略——一方通行は、その赤い瞳を爛々と輝かせて、目の前に立つ少女と向き合う。

「あア、勿論だともよオ」

「では、実験開始まで、残り1分3秒です」

「……フヒッ」

「そのおぞましい笑いは何ですか？ と、ミサカは疑問を呈します」

「さアて？ なんでもしオかねエ？」

「実験開始まで、残り14秒。と、ミサカは寒気を感じつつ状況報告を行います」

「そうかそうかア……」

ミサカと自らを呼称する少女は、手に持つ、その細い体軀には似合わないサブマシンガンを胸に抱く。彼女なりに一方通行の異常さを感じたのだろうか。

一方通行の口角がつり上がり始めた所で、ミサカは静かに声を発した。

「個体ナンバー100024、実験を開始します」

ミサカがそう声を発した瞬間である。轟、と風の鳴く音と共に一方通行は姿を消した。

「なっ……!!?」

突然の出来事だった。

冷静に周りを確認し、銃器を構えたミサカを一塊の風が襲ったのである。

ビリ。ミサカの捉えることのできた音は、それだけであった。

明らかに布に関連する音。

ミサカは恐る恐る視線を下に向けると。

「なあぁーっ!!? ミミミミサカは羞恥のあまりしゃがみこみま
すっ!」

誰か彼を止めて欲しい。

一方通行が切り裂いたのは、言うまでもない。

そんな時である。

一方通行のよく知った声が響いたのは。

第18話

月明かりという名のスポットライトは、一方通行の顔にモアイのような影を作らせていた。

よく知った、今は非難の視線を一心に浴びてるからこそその光景。微動だにしない一方通行は、ユーモアの塊と化していた。

「お、お姉様、ですか？　とミサカは上目遣いで訪ねてみます」

しゃがみ込みながら、言葉の通り上目遣いで美琴を窺うミサカ。別の白い人がピクリと反応したが、美琴は砂鉄で出来た黒い剣を飛ばすことで制する。

能力は？　と思えるような無抵抗さで空中をスピンしながら飛んでゆく一方通行。感謝の念や、突然の邂逅。ミサカのは表情は、表現し難いものだ。

ドシヤリと潰れたような音が響く。

「……ねえ」

「な、なんでしょうか、とミサカは答えます」

最初に質問をしたのはミサカであるが、美琴に構う様子はない。ミサカは素直に応答するのだった。

「色々とき、話があるんだけど――」

尋問。

言葉責め。

吐かせるための、拷問。

ビリビリ。

次々と明らかになってゆく事実。

一方通行の企み「美琴ユートピア計画」から始まり、学園都市地下に作られた一方通行の空間、云々。

全てが語られると、一方通行には自然とモザイクがかかっていた。原型は辛うじて残っている。見るに絶えない有り様ではあるが、一方通行の口は「あア……イイ……」と蠢いているので問題は無さそうであるが。

一連の光景に言葉も出ない様子のミサカ。

そんなミサカに美琴はチラと視線をやると、何も言わずに立ち去ろうとする。

ミサカにはどうしたら良いのか分からない。おどおどしていると、美琴から呼び掛けられるのだった。

連れていかれるミサカ。

一方通行は震える右手を伸ばした。まるで逃がしたくない、とでも言うかのように。

すかさず飛んでくる、青い電撃。

黒い煙を発しながら一方通行は地に伏した。

第18話（後書き）

控えめ。

こんな奇怪珍妙混沌作品ですが、待ってくださる方がいたら、更新空いてしまい申し訳ないです。

第19話

窓のない、学園都市の一角に陣取るビル。それは異様の一言でも表せ、林立するビルたちがそれを際立たせていた。

外界を拒絶する外壁の、その内側。

階層は分らない。が、一ヶ所だけ大きく一つの区域として成り立っている空間がある。

そして事はそこで起こった。入室方法も限られている限定空間の中で、叫び声が響いたのだ。

空間の中心、大きな大きな試験管のような容器。液体で満たされたその内側、一人の人間が上下逆さまに浮いている。発声源は、その中のものだ。

『何故だ……。どうしてこうなった？ いや、どうしてこうなれた！？』

男とも女ともつかない、幼子のように老人のような。聞いていると不愉快になってもおかしくない、不思議な声色。

学園都市の理事長、その人であった。

そして彼の名をアレイスターといった。

アレイスターがこれほどまでな取り乱す、これはアレイスターを知る人物ならば、それにどれほどの意味が込められているか分かるハズである。

「ちょ、ど、どうしたんだ!？」

例に漏れずアレイスターの取り乱しように困惑する人間が一人。金髪を逆立たせサングラスを着用し、アロハシャツといった不良そのものの出で立ち。

「土御門……君か」

それまで頭を抱え試験管の中で悶えていたアレイスターは、土御門の姿を見付けると、途端にキリッとした表情に変化していた。その変わり様に若干の戸惑いを得つつも、土御門は疑問を呈する。

「一体何が？」

「ああ……とあるプランがブッコロリーになってしまっただけね」

「ブ、ブッコロリー？」

「忘れてくれたまえ。単純に一つのプランが棄却されただけだ」

「そうかい……でもそりゃまた、不味いんじゃないのか？」

「ふむ。君は一方通行と面識があったね？」

面識があり過ぎる。土御門は顔をひきつらせた。

「ついにやらかしたか……一方通行」

「その通りだ」

「一体何を」

「ナニだ」

「おーけー、把握」

土御門の脳内では、彼が見た限りでの所業が流れ始める。

美琴に飛び付く一方通行、鼻の下を伸ばす一方通行、掲示板での
(21)。

「大した問題では無いのだが……」

「じゃあ何故に悶えていた」

「滞空回線を知っているだろう？」

「ああ」

「聞こえてしまったのだよ。そう、色々」

「それ以上言わないでくれ」

「道連れという言葉を知っているね？」

「ちょ……待て！」

土御門の抵抗も虚しく、その空間は完全に閉鎖されてしまう。アレ
イスターから必死に距離をとろうとするが、声は届いてくる。

耳を塞いでも尚、届いてくる。

その話に絵を付けると、間違いなく激画タッチになるだろう。

土御門は最期に言葉を残した。「アッー!」と。

第20話

朝。

太陽が顔を出し始め、蟬が鳴き始める頃。美琴と黒子は郊外にある木に囲まれた通学路を辿っていた。

美琴は不機嫌さを隠そうともせず、その眉間には皺が刻まれている。

先ほどからずっとこの調子である。この何とも言い難い空気、黒子がついに口を開いた。

「お、お姉様……？」

「何よ」

「私、何かやらかしましたの？」

「なんのこと？」

「ならば……どうして不機嫌なんですか？」

「別に。不機嫌なんかじゃないわよ」

言葉を裏切り、しかめっ面を変える様子の無い美琴に、黒子はただ戸惑うばかりである。

（原因があるはずですよ……）

それで間違いないだろう。黒子は自身の記憶を掘り返し始める。

（昨日全裸で迫ったのがいけなかったのでしょうか？ ……いや、

それはいつものことですし)

ベクトルのねじ曲がった思考は止まることは無い。

(夜這いのせい？ でもアレは筋肉バスターで済んだではありませんか)

悪事は数あれど、黒子の脳内では当たり前の所業のようである。

(……となると、ですの)

それは3日程前のことである。

久方ぶりに常磐台に戻ってきた美琴。黒子の熱烈な歓迎を完全にスルーし、荷物だけを置いたかと思えば、黒子の抑止も聞かずに真夜中にどこかへ出掛けていった美琴。そして帰ってくれば、一目で落ち込んでいる、と判断出来る面持ちで帰ってきたのだ。

顎に手を当て、黒子は自らの思考の渦に飛び込む。

すると自然と浮かんでくる、白いあの人の姿。黒子はカッと目を見開いた。

「アイツですよ！」

「な、何よ……急に」

「あの……何て言いましたっけ……白髪変態の野蛮人」

「……っ」

美琴の頬がピクリと震えるのを見て、黒子は確信を持った。

しかし一体何があったのだろうか、という疑問が湧き上がってくる。誠に、誠に遺憾ながら、黒子の目には仲が良く映っていたのだ。

（これは……もしま。チャンスですの……！？）

変態方面でのポジティブシンキングは、黒子に敵うものはいないだろう。いや、一人いたが。

動きが止まってしまった美琴に、黒子が口を開きかけた。が、それは外部の干渉によって止められた。

突然がさがさと音を立てた道の傍らの草むら。

言うまでもなく、誰かがそこにいる。美琴も黒子そちらについて目をとられてしまう。

「……………」

無言の空間が続く。

しかし何も起こらない。業を煮やした黒子が誰^{すいか}何を問うが、それに応える声は無い。

黒子はちらりと美琴に視線を向け、頷きという了承を受けると、草むらを掻き分けた。

そこにあつたのは。

「な、にをしているんですの……。ですのっ!？」

「お、にーちゃん……。っ!？」

深々と下げられた頭、綺麗に揃えられた両の手のひら。土下座をした一方通行の姿であった。

そして、それだけなら受け止めるだけの余裕があったのかもしれない。

彼は全裸だったのだ。

第21話

「あ、アンチスキルは何処ですのっ!？」

第一声。黒子はわりとまともな反応を示していた。

美琴が一瞬黒子を不気味な物を見るような顔をしたが、一方通行黒子共に気付くことは無かった。

そして、黒子の悲鳴らしきものを聞いて、一方通行はゆっくりと顔を上げた。

「……!？」

美琴は思わず肩を抱いていた。鳥肌が止まらないとはこういうことなのかもしれない。美琴はその表情に心の底から嫌悪感を感じてしまっていた。

それもそのはず、である。

鼻水垂れ流し、涙を流したのだろうか、その目は真っ赤である。

そしてその顔にはどこと無く悲壮感が漂っており、極め付けに眉は八の字を描いてるのだ。

(これはゾンビですか!?)

(これはゾンビですよ!?)

声に出していないから助かっているものの、色々と問題のあるフリーズを思い浮かべていた二人であった。

勿論、それが一方通行に伝わることは無い。

一方通行は一つしゃっくりをすると、しわがれた声で話し始める。

「むゝいごとオ……」

そう言ってから、プルプルと右腕を美琴の方へと差し伸べるが、もはやそれは傍から見ればゾンビを連想させるものだったから助けようが無い。

思わず声を上げて後ずさった美琴。

おまけにとばかり電撃を飛ばし、追撃として黒い砂鉄の塊が一方通行を襲う。

ぶるるるああああ、と悲鳴をフェードアウトさせながら飛んでゆく一方通行。

(オーバーキルエ)

黒子がそんなことを思い浮かべたが、そこは今論点ではない。

そこで我にかえたのであろうか、美琴は息を一つ飲むと、走り去ってしまう。

「あ、お姉さま！」

「事後処理お願い！ 風紀委員でしょ」

「え、ちょ、おまつ、ですのん」

「じゃあねっ」

段々と小さくなってゆく美琴の姿を呆然と目で追うことしか出来ない黒子であった。

第21話（後書き）

G
W

ガチワロスと読んだ友人の脳内環境を切実に知りたい今日この頃。

第22話

「どうしてこうなった……いえ、どうしてこうなれたんですの？」

美琴が謎の退場を果たしてから数分の後、黒子は一方通行が飛ばされた地点へと足を向けていた。そして見付けてからの第一声がこれである。

というのも、その光景を見て驚かない人間はよっぽど肝が座っているか、己が同じ経験をしているかのどちらかに違い無いだろう。言わずもがな、黒子は後者である。

その黒子が呟く程の光景。――忘れてならないのは、一方通行は産まれたままの姿であること。

そして、一方通行は街灯に突き刺さっていた。万有引力をガン無視して、地面に斜め45度を保ったまま突き刺さっているのだ。それも頭から。槍投げ金メダリストも真っ青である。

そして全裸。大事なことなので何度でも描写しよう。

黒子は携帯を取り出すと、一方通行へと向けた。続いた音はシャッター音と思われる『タリラリラーン』というもの。黒子のセンスは素晴らしいのだ。

何はともあれ黒子のネタフォルダに新たな仲間入りを果たした一方通行であった。

それはさておき、一方通行をどう処理しているのか、という問い

は予想以上に難問である。

携帯をしまいほんの一瞬だけホクホク顔をした後、黒子は一方通行に改めて視線を向けた。

見れば見るほどホラーである。

それに中々にシュールな光景である。

——と、変化は突然訪れた。

——へなり。

なんとも理解し難い効果音と共に、一方通行は折れた。そう、折れたのである。腰を頂点にブリッジである。

——バベルの塔がそびえ立った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6201q/>

そのベクトルをねじ曲げて

2011年10月7日02時38分発行